

銘板

## 王子馬車軌道（馬てつ）跡

設置:平成元年(1989)9月 位置:新得町字屈足22号坂下

至ル駅土場7.4軒

至ル川土場9.5軒

←———— 王子馬車軌道（ばてつ）跡 ———→

- ・区 間 新得基線43番地一屈足基線229番地  
(新得駅土場) (パンケニコロ川土場)
- ・延 長 16.93軒 (10.525マイル)
- ・期 間 大正10年~昭和3年 8年間

平成元年9月 新 得 町 設置  
新得町郷土研究会 調査

昔、十勝川流域の王子木材(株)の木材輸送は、流送によって川土場に集結され馬車軌道により、新得の駅土場まで運ばれた。

この馬車軌道は「ばてつ」の愛称でみんなに親しまれ、時には学童が便乗させてもらうのどかな風景もあったが、ここから南に向かっての佐幌高台越えの坂道は人馬一体の難所であった。

昭和3年12月拓殖鉄道の屈足駅開業により「ばてつ」は、駅までのガソリンエンジン軌道車に変わり8年間に及ぶ運材の幕を閉じた。

この場所は、「ばてつ」区間のほぼ中央点に当たる。



### 【注記】

十勝川源流域の原木は、帯広まで流送する計画であったが、距離が長いので、北海道の王子製紙の造搬事業の機械合理化として、初めて馬鉄が導入された。この馬鉄の効率が認められ、各地で流送陸揚場から駅土場までの運材のために馬車軌道が設置された。

銘板

## カムイロキの地名由来

設置:平成5年(1993)3月 位置:新得町字屈足34号十勝川対岸

### カムイロキの地名由来

母なる大河十勝川左岸に屹立する第三紀層の豪壮なこの大岩壁は、100万年以前の火砕流の堆積土が永年にわたり、十勝川の侵食により出現したもので、地域の人は「クッタリガンケ」、「十勝川ガンケ」(崖の意)と称して親しんでいる。この地をカムイロキという。熊の越年するところ、神様がお座りになるところの意味である。アイヌ伝説で伝えられてきたこの地は十勝川筋の霊地であったようだ。

この地を松浦武四郎(蝦夷地御用御雇)は、6回目の蝦夷地調査のため空知川を越え十勝に入ったのは、安政5年(1858年)3月13日であった。サホロ(佐幌)川を下向し、本川(十勝川)大崖を目標として歩行した。

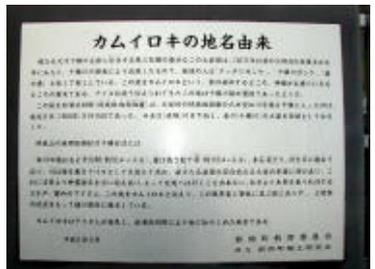
蝦夷山川地理取調紀行十勝日誌には

「本川の幅おおそ50尋(約90メートル)、崖は高さ数十尋(約100メートル)赤石混ざり、頂き平に崩れており、川は渦を巻きて吼々として大波たて流れ、岨々たる岩壁の灰白色なる大岩の半腹に洞穴あり、これには昔より神霊宿ると言い伝えあり。よって此処へは行くこと出来ない。此方より木幣を奉り礼拝するとかや。案内のアイヌ人、この地をカムイロキと云えり。この風景美に筆紙に及び処にあらず。」と絶賛の記述をもって徳川幕府に報文している。

カムイロキはアイヌ人が発見し、松浦武四郎により世に知らしめた地名である。

平成5年3月

新得町教育委員会  
撰文 新得町郷土研究会



### 【注記】

字屈足のくったり温泉レイク・イン駐車場のあづま屋の傍らに建っている。昔から、十勝川を挟むパンケ山と対峙するところと言われ、ガンケ(十勝川左岸火砕流大露頭)に一際入り込んで、木がうっそうと茂っている場所と考えられている。

## 屈足開拓発祥之地

設置:昭和61年(1986)8月 位置:新得町字屈足西2線8番地

屈足開拓発祥之地

明治三十五年五月十三日鹿児島県管於郡財部村の東郷農場より七戸が入植

入植場所 新得町字屈足西二線二番地付近

建立 昭和六十一年八月二十八日  
新得町教育委員会  
新得町郷土研究会



### 【注記】

屈足原野は、鹿児島県財部村第6代村長であった東郷実夫が、60戸分の農場の貸付請願をし、当初9戸で来道したが、2戸が断念し、中村良之助ら7戸30人によって開拓されたものである。

後に東郷は村長を辞め、明治36年(1903)頃家族を伴い、自ら北海道開拓に当たったが、病を持って札幌に移った後、昭和3年(1928)2月東京において65歳で没している。

## 屈足水田発祥之地

設置:昭和61年(1986)8月 位置:新得町字屈足基線66番地

屈足水田発祥之地

明治四十五年四月開田  
創始者 森口茂吉 開田 森口忍  
昭和六十一年八月 新得町郷土研究会



### 【注記】

屈足地区の開拓は、明治35年(1902)から始められたが、開拓民は一樣に米食への願望が強かった。森口忍は、字屈足西1線65番地に入植したが、父茂吉の指示により開田に取組んだのが明治45年(1912)で、流れ来る沢水を利用しての造田だったが、稲作は全くの無知、旭川永山からの宮腰某の手ほどきにより、ようやく生産するに至った。その後、地域一帯が稲作に転向していき、屈足米として喜ばれるとともに、屈足・上川土功組合ができ、十勝川やパンケニコロ川からも導水するなど、一大水田地帯となった。

しかし、昭和45年(1970)からの稲作転換政策により、約60年で終わりを告げた。

## 十勝川渡船場跡

設置: 昭和61年(1986)8月 位置: 新得町字屈足東2線25番地3

十勝川渡船場跡

管理人(舟頭)

初代 森 利三良  
二代 谷本久太郎

営業期間

自 大正三年  
至 昭和三年  
代金 人馬 六銭  
人 三銭

昭和六十一年八月建立

新得町教育委員会  
新得町郷土研究会



### 【注記】

屈足村から十勝川を渡りクテクウシ(鹿追)方面への交通の便が無いため、交通路として大正3年(1914)に、屈足23号先から新屈足千間坂へ通ずる官設渡船場として開設されたもので、人はもちろん荷馬車も運んだが、昭和3年(1928)に屈足橋(現新清橋)の架橋もあって、15年間の営業を終えた。

## 新得営林署

位置: 新得町字屈足緑町2丁目25

十勝川源流域の森林開発は、大正初期に王子製紙が製紙原料材の造搬に着手し、流送で搬出していたが、太平洋戦争の戦災復興用材の供出が求められ、昭和25年(1950)国が森林鉄道を敷設し、国の直営事業として造搬が行われるようになった。

同29年(1954)新得営林署が、清水営林署より分割、創設された。

同41年(1966)に森林鉄道が撤去され、自動車輸送に切り替わったが、生産される丸太は「東大雪材」という銘柄材で、屈足貯木場に集積され一大集散地となり、製材所も十数社を数えた。営林署や木材関係の従業員が増えたため、商店等も繁盛し、屈足は「木材の町」と云われ一時代を築いたのである。

同51年(1976)頃には、営林署の職員だけでも300人余を数えていたが、同56年(1981)の13号台風で生産量の10年分もの被害木を出した一方、国有林の合理化によって組織の改廃が進められ、平成11年(1999)には十勝西部森林管理署(清水)の森林事務所となり、同13年(2001)には、東大雪支署(上士幌)の管轄に入って事務所は閉鎖され、48年の歴史に幕を閉じたのである。

かつての貯木場や製材所の跡地は、すでに新興住宅地となり、福祉施設もでき、屈足は「福祉の町」に生まれ変わりつつある。



## 拓殖鉄道屈足駅の由来

設置:平成15年(2003)11月 位置:新得町字屈足幸町2丁目



### 拓殖鉄道屈足駅の由来

十勝平野北部地域の開発と産業を促進させ、開拓民の定住促進をはかるためには、鉄道の敷設が不可欠と、新得の菊田豊之助が発起人総代となり、北海道拓殖鉄道株式会社を設立した。  
 鉄道計画は、国鉄新得駅を起点に屈足、鹿追、土幌、上士幌を経由し、池北線足寄駅に接続させるもので、趣意書をもつて北海道長官をはじめ各界の賛成署名を得、大正十二年鉄道大臣の認可となり、同十四年第一期工事として新得と鹿追間の敷設に着手、昭和三年十二月十五日、鹿追までの営業運転が開始され、SLの汽笛が力強く鳴り渡り、住民は歓びと感動に浸った。  
 敷設工事は更に進み、昭和六年十一月には上士幌まで延伸、順次営業運転がなされた。  
 大正七年、王子製紙がパンケニコロ川流域から伐り出した原木は、馬車鉄道で(馬てつ)によって新得駅土場まで搬出されていたが、拓殖鉄道の開通によって屈足駅土場で貨車積みされるようになり、駅の土場では、東西約100メートル、高さ二、五メートルに集積され、屈足駅の家徴でもあった。  
 他に農産物の積み出し、肥料の取卸等農業経営にも少なからぬ恩恵をもたらした。  
 昭和七年には地域住民の便宜を図って、乗客専用の三十人乗りのカソリンカーが運行され、当時他に公的交通機関が無かった地域住民にとっては、更なる喜びであった。当時屈足の市街地は、基線二十二号が中心であったが、順次駅よりに発展し、以来電源開発の工事、新得営林署の誘致等により活気溢れる街並みとなった。  
 しかし昭和三十七年八月、台風九、十号による鉄橋、線路築堤の流失により莫大な損害を被り、さらにこの頃より輸送の近代化が台頭し、トラックとマイカーの急激な伸びは輸送需要に大きく影響した。これら諸般の状況から、昭和四十三年七月全線廃止を余儀なくされ、ここに四十年の歴史を閉じたのである。  
 この間多くの町民が受けた恩恵と思いをここに銘記し、後世に伝えんとするものである。

平成十五年十一月

新得町教育委員会  
新得町郷土研究会

### 【注記】

昭和43年(1968)7月31日廃止の日には、鹿追・新得間に「さよなら」列車が運行され、鹿追町、新得町、清水町の代表者約100人が乗り込んで、最後の列車運行に別れを惜しんだ。

## 上川灌漑溝水門遺構の由来

設置:平成8年(1996)3月 位置:新得町字屈足岩松町道38号地先



### 上川灌漑溝水門遺構の由来

屈足・人舞両地区の水田二千町歩(約二千ヘクタール)の灌漑のため、上川土功組合(大正六年発足)が三十九万八千五百円で木造水門の建設を計画するも、コンクリートへの設計変更設計不備による改修、自然災害の復旧など物価高騰と重なり、受益者から七千九百五十三円(約四千八百万円)の反別割負担金を加え、七十八万八千四百六十六円(約四十七億三千万円)の巨費をもつて、ここ町道三十八号地先の十勝川右岸に完成させた。見上げる程の堤、水門から入った水はパンケニコロ川の下をわん管(トンネル)で通り抜け、パンケニコロ川の堰堤で合流し第二水門から上川大幹線となり豊穰の期待を乗せて水田を潤した。  
 大型機械も無い大正十年前後、この難工事をどのようにして完成させたのか。また水門の維持運営に、先達の筆舌に尽くせぬ努力があったことと深く想いを至すのである。  
 昭和三十四年八月二十七日の集中豪雨で修復不可能な被害をうけ、その使命を閉じた。大正十年から約四十年間に亘り一大稲作地域を発展させたこの水門跡は、往時を語る貴重な遺構としてその由来を記し、永く後世に伝えんとするものである。

平成八年三月

調査・撰文 新得町郷土研究会  
新得町教育委員会

### 【注記】

屈足地区の稲作は、明治45年(1912)の試作に始まり、大正4年(1915)には、屈足土功組合が設立され、次第に地域一帯が稲作農家として営農するようになった。それにつれ水田の用水が必要なことから、十勝川右岸に水門を設け導水を計画。上川土功組合も結成されて取組まれた。この水門や灌漑溝の造成には、タコ労働者も投入されたという。括弧書きの金額は、現在額に換算したものである。

## 屈足小学校

位置:新得町字屈足基線42



明治37年(1904)6月27日、人舞簡易教育所所属の屈足特別教授場が創設された。校舎は、屈足基線48番地の掘っ立て木の皮ぶきの民家を借り受けたものであった。この教授場はわずか19.8㎡(6坪)で、児童数17名にはあまりにも狭かったため、翌月には地域住民の協力により基線42番地に草葺き掘っ立ての校舎が建てられた。39.6㎡(12坪)の校舎で、手挽きの机、丸太椅子によって授業が行われた。

明治39年(1906)7月10日、人舞簡易教育所から分離し、屈足簡易教育所として独立し、同42年(1909)6月15日には、屈足尋常小学校と改称された。同45年(1912)4月、教室二教室、事務室などあわせて214.5㎡(65坪)の校舎をすべて地域寄付によって増築した。大正8年(1919)4月、高等科の併置校となり、屈足尋常高等小学校に昇格した。昭和6年(1931)には、在籍児童数が275名を数えるまでの大きな学校になっている。

同22年(1947)、学制改革により、戦時中の国民学校が改められ屈足小学校となった。このころ、戦後の経済復興の波を受け、南部市街地の発展がめざましく、同27年(1952)に南分校が開校された。南分校は、同29年(1954)に屈足南小学校として分離独立。

しかし、平成16年(2004)3月、児童数の減少により、かつて分校であった屈足南小学校に統合され、屈足小学校は百年の歴史を閉じた。

明治37年(1904)6月27日開校。平成16年(2004)3月31日閉校。



## 屈足神社

位置:新得町字屈足緑町4丁目23番地

明治40年(1907)9月、太田常右衛門・平槌五郎ら11名によって字屈足基線52番地(27号風防林地内)に建立されたことに始まる。

その後、大正後期から昭和初期にかけて、屈足22号付近に市街地が発展していったことから、昭和17年(1942)、将来の神社移転予定地として現在地の一部を取得した。

同39年(1964)10月、社殿の老朽化によって市街地中心部に移転して新たに社殿を造営しようという気運が高まり、屈足神社移転造営期成会が設立され、同41年(1966)11月23日に浄財211万円をもって、屈足緑町4丁目23番地(屈足基線22号付近)に鳥居・拝殿・神殿等を造営した。同60年(1985)、現在の金属製の鳥居を建立、平成元年には狛犬が奉納されている。

平成元年(1989)10月、神社本庁より認証を受け、翌平成2年(1990)1月22日には宗教法人屈足神社の認可を得た。平成19年(2007)、御創祀100年記念事業として、神楽殿・鳥居の修理等を行い、11月奉祝祭が斎行された。祭神は、天照皇大神宮。

